

4 果 樹

項 目	作 業 内 容																								
(1)かんきつ園 の冬期管理	(今月の作業のポイント) ○かんきつ園の冬期管理 ○中晩柑類の収穫・貯蔵 ○間伐・縮伐 ○越冬病虫害防除																								
	3 か月予報では、気温は平年並みか高い予報で、降雨量は平年並みか少ない予報である（高松地方気象台 10 月 21 日発表）。この時期は果実の凍結や寒風害の発生が懸念されるため、気象情報に十分注意し収穫や貯蔵を行う。																								
	ア 施肥、土壌管理 (ア) 苦土石灰等の施用 土壌が酸性化すると根の生長が不良になり、カルシウムやマグネシウム、ホウ素の欠乏を招いたり、落葉を助長するマンガン過剰症等が発生したりする。土壌中の微生物の働きも弱まり、有機物の分解も緩慢になる。酸性土壌の園は苦土石灰等を施用し、好適 pH(5.5～6.3)に矯正する。																								
	(イ) 有機物の施用 有機物を施用することで、土壌の通気性や保水性、保肥力を増加させ、細根の発生しやすい条件を整えることができる。細根の増加は、樹勢の維持につながり、果実品質を向上させることから、完熟した牛糞堆肥や敷きわら等を積極的に施用する（表 1）。																								
	表 1 家畜糞尿の施用（愛媛県施肥基準）																								
	<table><tr><th colspan="2">項目</th><th>オガクズ 牛糞堆肥</th><th>オガクズ 豚糞堆肥</th><th>乾燥鶏糞</th></tr><tr><td colspan="2">窒素含有成分量</td><td>0.5%</td><td>1.0%</td><td>3.0%</td></tr><tr><td colspan="2">化学肥料に対する肥効率</td><td>30%</td><td>70%</td><td>100%</td></tr><tr><td rowspan="2">10a あたり 施用量</td><td>うんしゅう みかん</td><td>2 ～ 3 t</td><td>1 t</td><td>200～300 kg</td></tr><tr><td>中晩柑類</td><td>3 ～ 4 t</td><td>1 ～ 2 t</td><td>250～350 kg</td></tr></table>	項目		オガクズ 牛糞堆肥	オガクズ 豚糞堆肥	乾燥鶏糞	窒素含有成分量		0.5%	1.0%	3.0%	化学肥料に対する肥効率		30%	70%	100%	10a あたり 施用量	うんしゅう みかん	2 ～ 3 t	1 t	200～300 kg	中晩柑類	3 ～ 4 t	1 ～ 2 t	250～350 kg
項目		オガクズ 牛糞堆肥	オガクズ 豚糞堆肥	乾燥鶏糞																					
窒素含有成分量		0.5%	1.0%	3.0%																					
化学肥料に対する肥効率		30%	70%	100%																					
10a あたり 施用量	うんしゅう みかん	2 ～ 3 t	1 t	200～300 kg																					
	中晩柑類	3 ～ 4 t	1 ～ 2 t	250～350 kg																					
	イ 防寒対策 春先の寒風害による落葉は、翌シーズンの果実生産に大きく影響を与える。うんしゅうみかんでは、最大風速 7 m/s を越えると落葉が急激に増加し、特に気温が低いほど助長されることから、防風ネットや防風垣を整備して予防する。																								

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 中晩柑類の収穫、貯蔵</p>	<p>ア 中晩柑類の収穫 清見、せとか等の中晩柑類の収穫は、糖度、クエン酸のチェックを行い、各地域の採収基準に達してから行う。果実を遅くまで樹上に置くと品質は向上するが、寒害の恐れがある場合は収穫を早める。</p> <p>イ 中晩柑類の貯蔵 いよかんの貯蔵については適正入庫量 (0.8～1.0t/3.3 m²) を守る。庫内が高温・多湿となるとへた落ちや軸腐病、黒腐病が増え、正品率の低下を招く。このため貯蔵中は、壁や天井部分が結露しないように換気を行い、循環扇などで庫内空気を循環させる。なお、3 L以上の果実はス上がりしやすいので、各 JA や各地区出荷計画に従い早めに出荷する。</p> <p>不知火の予措については、風通しの良い倉庫の軒下や開放した貯蔵庫で、減量歩合 3～5 %を目安に行う。新聞包装、ポリ個装などの貯蔵方法があるが、酸の高いものについてはポリ個装を行い、貯蔵期間を長くして減酸を図る (写真 1)。</p>
<p>(3) 間伐・縮伐</p>	<p>密植園では、受光環境が悪く、果実の着色や肥大、糖の蓄積が劣る。また、防除の際に薬液が十分にかからず、病虫害の発生が多くなる等の弊害があるため、間伐・縮伐を行う。樹と樹の枝先が交差して樹間を歩いて移動しにくくなったら、間伐・縮伐の目安である。</p> <p>混植している園や老木、不良系統がある場合は、生産性が悪くなり、管理作業も負担がかかることから、間伐に合わせて伐採する (写真 2)。</p>



写真 1 不知火のポリ個装



写真 2 間伐を行った園の様子

項 目	作 業 内 容
<p>(4) 越冬病虫害 防除</p>	<p>ア かんきつ</p> <p>ミカンハダニやカイガラムシ類等の越冬害虫の防除については、1月にマシン油乳剤(95%)を散布できなかった園地では、発芽前までに同剤を必ず散布する。また、カイガラムシ類が多く寄生している枝葉やかいよう病等の発病枝は取り除き、園外に持ち出して、発生源をできるだけ除去する。</p> <p>イ 落葉果樹</p> <p>かきにおける炭疽病の病原菌は、枝の病斑や芽などで越冬することから、罹病した枝はせん定の際に必ず取り除く。また、フジコナカイガラムシやカキノヘタムシガといった越冬害虫については、冬季の粗皮削りにより駆除する。</p> <p>キウイフルーツにおけるかいよう病対策として、せん定前後の薬剤散布は重要である。特に、せん定後は樹体に切り口が多くなり病原菌が侵入しやすくなっているため、トップジンMペーストや銅剤散布による切り口の保護に努める。</p>

(作成 果樹研究センター)